

実習を終えて

現代日本語学講座 2年

久野百代

1. はじめに

2012年2月13日から約3週間にわたって行われた日本語教育実習は、自分の教師としての課題や、日本語教育とはどうあるべきかということを考える非常に良い機会となった。このような貴重な経験ができたことに感謝しつつ、実習の感想、反省、課題を記し、これから実習を行う方々の参考になれば幸いである。

2. カリキュラムデザインについて

今回の実習では、特定の教科書に沿って教えるのではなく、「何を教える必要があるか」ということを考えるところからスタートし、場面シラバスと can-do statement を作成した。

この作業は自分にとってとても印象的であった。コース全体の目標だけでなく、その下位目標、一日ごとの目標、さらに、授業中に行うタスク一つひとつにも目標が設定されるべきであるということを知ったことで、学習者の為という点だけでなく、自分にとっても、それぞれの活動のコース中の位置を把握することができ、授業がしやすくなった。ただ授業を行うのではなく、授業前に到達目標を決め、それを目指して授業を行うということは当たり前のことであるが、自分の中では明確に意識されていなかったもので、カリキュラムに対する考え方がこの実習で変わった。

3. チームティーチングについて

実習では、実習生8名とTAの方々がチームを組み、交替で授業を行った。授業内容と学生の様子はメーリングリストで報告し合ったが、各チーム同士の連携が不十分であり、反省すべき点だと感じた。それぞれのチームが各々の授業準備で忙しく、使用したプリントや器具の使用法などを効率よく共有することができなかった。学習者を混乱させてしまわないよう、共通のルールを細かく定め、チームで教えていると

いうことを意識して授業に臨むべきだと感じた。

4. ビリーフスについて

ビリーフスは変化しにくいものであると以前は考えていたが、実際には、実習前と実習後で、自分のビリーフスが大きく変わった。以前は学習者の視点からのビリーフスが多かったが、実習を経て、教師の視点からのビリーフスが増えた。変化したビリーフスや新たに得たビリーフスはたくさんある。例えば以前は、学習者自身がやる気を出して内的動機づけで学習しなければ、学習は成功しないと思っていた。しかし、実習後、動機づけが成功しさえすれば、それが教師から与えられた外的動機づけでもよいと考えるようになった。時には学習者が考え付かなかったことを教師が提示し、それを学習者が受け入れることで学習が成功することもあるからである。

5. おわりに

今回の実習では、反省点も課題も数多く感じたが、一方で教壇に立ったという自信がついた。私の場合、この経験で助走をつけ、実習後実際の日本語教育現場に飛び込むことができた。今後もこの実習で得た教訓を忘れず、より良い教師を目指したい。